



1-24  
1984  
2止

田村



十八十九日...  
 廿日...  
 十七日...  
 十六日...  
 十五日...  
 十四日...  
 十三日...  
 十二日...  
 十一日...  
 十日...  
 九日...  
 八日...  
 七日...  
 六日...  
 五日...  
 四日...  
 三日...  
 二日...  
 一日...

田村



けちみよしうしむ勢あひくることなる。行宮乃石  
む急しよあまろれと死まうしうしう人さむかほつ  
松乃亮事とをりてあふげ身して

世におりあまろ御影ふたぐわト

民やさるれとうしうしう松

あつをとりあまあまわたりこらあま名寄に  
喜墓のさうしうしうしう

繁らりあねあれ里人はあまをれ

さうしうしうしうしうしう

美江寺とりあまがしうしうしうしうしうしうしう

しう

しう

るしうあましうしうしうしうしうしうしうしう  
帳をいれうしうしうしうしうしうしうしうしう  
て人はあまあまあまあまあまあまあまあま  
おれしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう  
て礼物はしうしうしうしうしうしうしうしうしう  
しうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

たれしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

しうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

廿一日金井をふらしうしうしうしうしうしうしう  
先しうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

しうしうしうしう

しうしうしうしう



水よりあり南ま乃華表を南ふありとれく  
それおをまらぐ

又あんとりつまれ山の神ありと

まー七勢ありーとらふとまそ

名をさるに南れま乃ちひとて

山乃ひひーのなそまー記

美濃玉の哥枕乃名所それ而さひはくそ

志す神とひまうらふ事とをも筆れ次り

去あつめ侍るー  
希ふまてみれとやまれ松乃うまれ

と

うれーま才少もあまれ羽衣

西人の後云は山より天人の影向

有ふらうて人來乃松とも名付侍る

とや

あまの衣をれ、中山あえゆあを

あまともふ忍ゆ教をさぬひ乃里

ほくくまは祿元の里ふ宿くは

いらてうまらん 新事乃ひとこ

ちくま乃梢ありともみえなくあ

誰母山とらつあろうせんま

誰母山



ゆられる志々記うき身代目さびに  
なつてけりまうふな草一乃露  
る月面乃紅葉をそむたけありい  
み木のやまふいりあつねん  
七夕乃あつたけいとを記かきき乃  
あつたけのそとを先やまうらん  
東海のうちを乃清あり名とくを  
まうふまうびりたつ乃市人  
まを書れまの申こ川よ月まわを  
あつたけ出まうまう乃志々みち

コト人はる忍ぶりまうあ海の水  
あつたけなうふまうたつねを  
むらる田をを物まう志々海や  
いけあまうりれあてまうらま  
いくちとあまうらぬ御代は唐田の  
あつたけ乃まうひまうらまありよ  
あつたけのまうらまあつてし  
こー申のまうらまあつてし  
世の人れあつたけむまうらまあつてし  
いけらまうらまあつてし

あつたけ

あつたけ



と江に米雷馬といつたふりなるをうへさく南へ  
行書と物名ふりたりて

多形野不申うこまゑとくささるめはあつた

日くち乃乃物よ志をうこまれ

まろ針跡を南へ下敷とてたふりたりを  
筑生崎をとうけふんをくまをさより眼を  
こくま。ちをともふを津田といつた所のはらに田  
をともぬ。又た乃くまをひえぬぬぬぬぬ  
松乃一本あねそは下に石塔あり西行は所  
が塚といひはくへぬるとなる

南行數里下陽坡 西望平湖遠不波  
孤鳴屹然何所似 瑠璃萬頃一青螺  
まじひころをほころひぬまやまら針乃

あむまおまねもぬらんうまね  
西行の舟に おろくまをたをてあてまを  
ろれささうた乃望月の比とあつこと  
知りひあき

いふて松の陰よるをうこま

む乃まをうこまの紫

かひまをむしふと申うこま





とくし一も目も苦うふなりぬれを小野と  
 りあふしそ行そまをたさね小席ふ一宿  
 一ぬまま太史ありあひて一あるとい  
 て羈<sup>ま</sup>然となくさあゆり

松ゆつをたささう乃みーのたも  
 多ひうーあまをぬーのはう

サ二月小野とともちて多賀とらふあをさ  
 社あり

ありをてし神さひみりり多賀の宮  
 たうせよくくを祝ひろめうん



四十九院と物々よあはらむ

かり人ら山よきうらむし

あはぬあつた我うおとなく

宮河原きあひの徳をうりあり

さゆりたるまの原水もあ

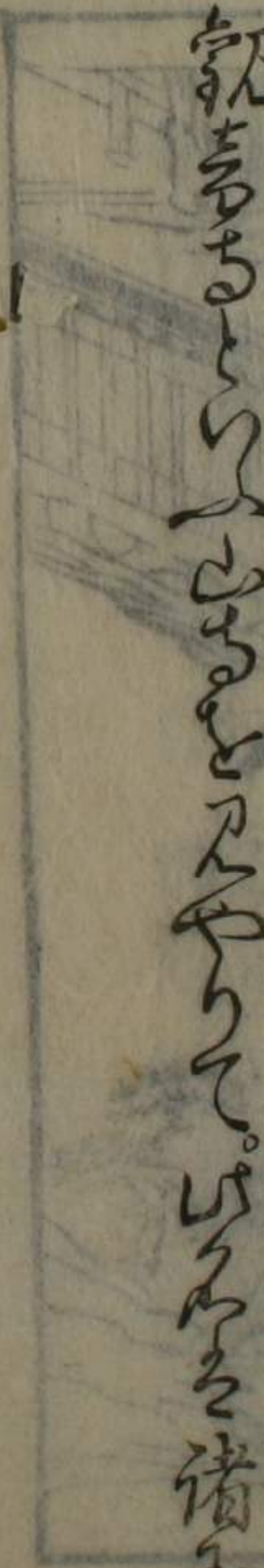
こころいふそとに月面乃比

あらし川とさくさく

あらし河乃さそとに流るふり水れ

あつたもさくぬ袖もぬれり

親きまらふしとさくさくやうて。ひらきを諸ふ



あつたや二重廊の御侍とおひ出て

あつたもははく乃様をれや

あつたさくさくさくさくのお

おつた乃さくさく

我袖よ弱もさくぬたさくさく

あつたさくさく乃さくさくさく

あつたさくさく乃さくさくさく

あつたさくさく乃さくさくさく

あつた武佐とらあつたさく

あつたさくさく乃さくさくさく



むしろうむさふれなきあつらひ

廿三日夜むさふ還留と。うちとくり此事  
傍船乃方より伊庭より付ゆる。三里計  
る。そそむる。使より出く。留まらり。これ  
伊庭より。使乃行る。さる。時刻うら。此  
より。さ。さ。白。八。面。あり。風。を。か。し。て。を  
西。ふ。れ。小。庭。乃。り。お。し。な。ら。ぬ。旅。乃。も。れ。う。さ  
し。ら。ぬ。も。あ。ら。し。

南来小望漢宮天  
白髮更添新白髮

一葉紅毛船雨眠  
青道不是舊道

廿四日伊庭よりより兵士来る。その日し面風  
やまに水只成とくとて

西ふれし小田乃あり口せさもあつらひ

かろくして。み。十。町。より。行。て。新。宮。乃。り。場  
お。し。ら。ぬ。後。留。乃。居。と。り。て。面。を。新。宮。に  
山。に。さ。し。し。ら。ぬ。も。あ。ら。し。乃。船。同。乃。も。あ  
ら。ぬ。も。あ。ら。し。乃。船。同。乃。も。あ。ら。ぬ。も。あ。ら。し。

才。又。日。る。場。を。ゆ。め。し。て。居。る。ゆ。め。し。て。居。る。  
能。得。三。生。石。上。縁。一。店。風。雨。意。云。眠



今朝更下中筋路

老樹雲深哭杜鰲

繁りあはれを又あはれ乃り抱

むとひやとそん一帯をりふ

かひるる水口より伊賀れをとりふたふま

支度なれど洪水に居ると事安らふ

おろし玉乃うち玉籠もとのつ律院ふとゆる

本音を茶師如きあてましまたとり

たうめもやあはれさ乃ををれて

あられをりあうつお目見

さら白くする日乃まらりさなりあはれを

あちて河井とらふあはれとささひつ橋を  
高松乃宮をたれとふまそく刀をた牛頭  
天子ふくゆまたとや

わらえぬうを海乃浪ふおれれて

河井の橋とあむそあやうさ

ゆらきてたうとああ勢一公

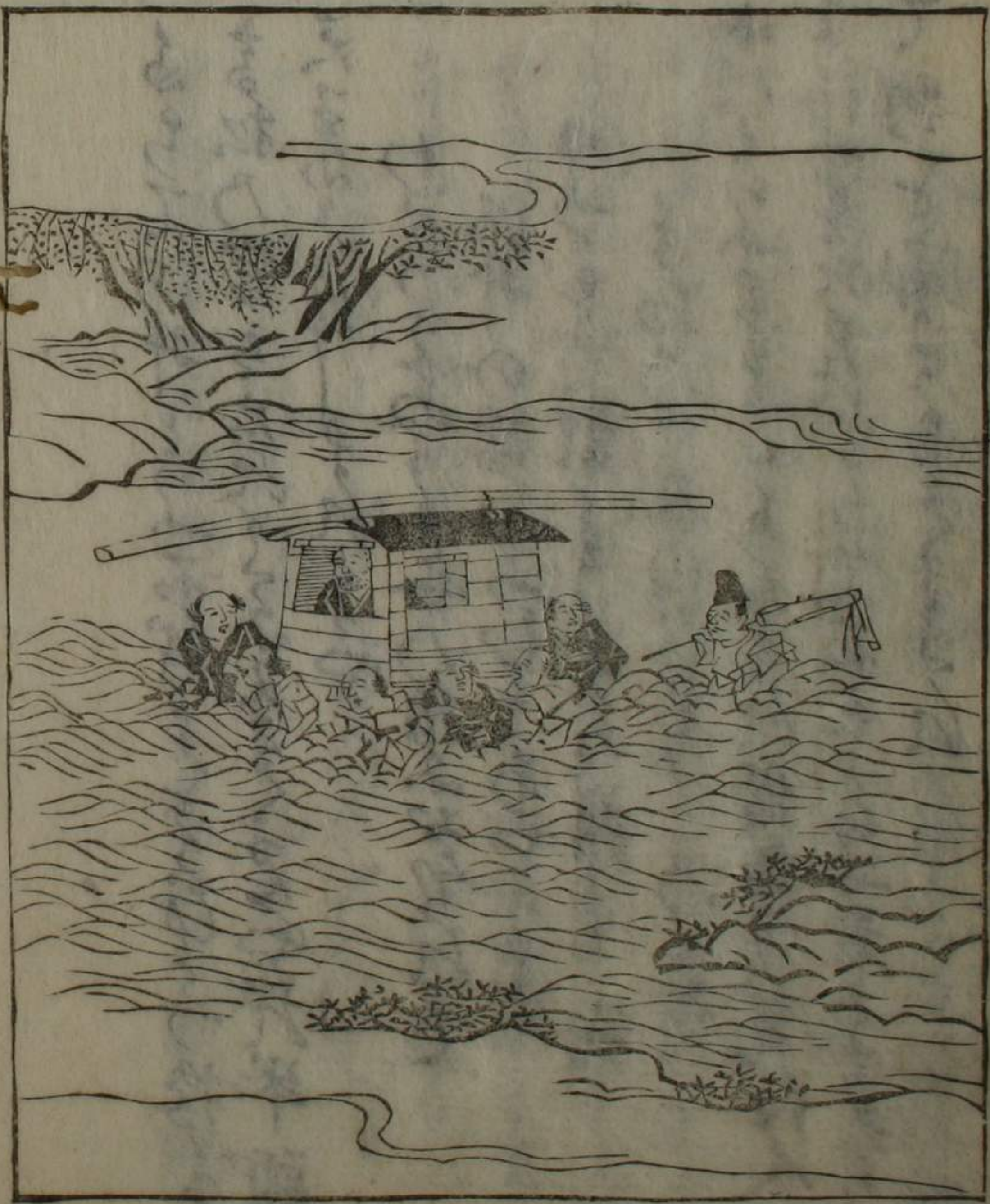
手向乃一魚のたき一乃え

水川とりよるまこあおちの傍給伊賀人  
は後つきたるいよらておまとのつ者ともま  
て響くと扇ようまこくこま

伊賀守日記

七四





いふ女んはさきさき川乃  
あさぬしとて人あはれせハ

又服部川とてさきさき菩提あはれさる。あれも  
相提門徒乃律院なり。まうあはれ事ハ法中  
ヤはさき伊賀のともくさきせむとて人  
サ七日程菩提あはれ逗留と伊賀のまれども  
さきさきとてさきさきとて

菩提樹下古精藍 殿閣傲涼奈南  
督信藤床兼有枕 勲々一騒味方南  
治斗乃うちと古乃乃又



やありきまじ

ちよひの海にまはれしをくわむらん

あやふしきしーまをくわむらん

廿八日菩提寺と云く。上野小田をくわむらん  
と云く。あやふしきしーまをくわむらん  
くわむらん。置置と云く。あやふしきしーまをくわむらん  
河と云く。あやふしきしーまをくわむらん

河をくわむらん

あやふしきしーまをくわむらん

大河系と云ある。伊賀と山城とれ境也。河系

乃本口と云く。茶栽をくわむらん

昔じきれ岩の小ねをくわむらん

あやふしきしーまをくわむらん

置置川と云く。あやふしきしーまをくわむらん  
あやふしきしーまをくわむらん。伊賀のくわむらん  
あやふしきしーまをくわむらん。あやふしきしーまをくわむらん  
あやふしきしーまをくわむらん。あやふしきしーまをくわむらん

あやふしきしーまをくわむらん

あやふしきしーまをくわむらん

あやふしきしーまをくわむらん

あやふしきしーまをくわむらん

あやふしきしーまをくわむらん



重光と云ふはあつたをいふ

乃らるるありぬる月

素燭乃何分南乃宿坊小はくは後なる  
もごころくまはる置小と申るつり

干時寛文十二壬子年三月吉辰

荒川氏宗長板行



